

## カトリック教会クアラルンプール大司教の退任

綱島(三宅)郁子

### 1. 突然だった大司教退任のニュース

2003年5月24日、カトリック教会のクアラルンプール大司教 Most Rev. Anthony Soter Fernandez, D.D.が退任された。筆者がこれを知ったのは翌日のスター紙だったが<sup>1</sup>、あまりにも唐突かつ簡潔な報道だったことに驚いた。直ちに世界中のカトリック教会の聖職者位階表を紹介しているサイトをクリックすると、既に大司教退任の日付が表示されていたのには、再度驚いた。

2年前、秘書からの要請により、思いがけず表敬訪問の機会を与えられた筆者としては<sup>2</sup>、とりあえず、これまでリサーチを許可されたことに対する感謝の意を表する必要があるのではないかと考え、本棚から英文プロトコルの厚い本を取り出して、短くお礼の手紙をしたためた。ポストに投函したところで、改めてネットで別の英語新聞を調べてみて、三度驚いた。この度の急な大司教退任は、地元の司祭にとっても衝撃的であり、その理由は健康状態の悪化だったとの内容であった<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> *The Star Online*, 'Archbishop Fernandez resigns', 25 May, 2003.

<sup>2</sup> *JAMS News* No.21(2001年9月) 拙稿「クアラルンプール大司教表敬訪問記」pp.22-25.

<sup>3</sup> *New Sunday Times*, 'Soter Fernandez steps down as archbishop, Pakiam to take over', 25 May, 2003. p.4, *New Straits Times*, 'Priests express surprise over KL Archbishop's

何が何だかよくわからないまま、お礼状などをお送りしてしまった失礼をお詫びするために、以前からリサーチのお手伝いをしてくださっている大司教館のアシスタント女性(50代)に、メールで確認してみた。すると大司教秘書からの伝言として「大司教も含めて、こちらは皆元気です。ここ4年以内に大司教が退任することは決まっていたのだけれど、少し早まっただけです。とにかく、大司教はお元気ですから心配しないでください」という返事がすぐに戻ってきた。一体これは何ということだろう。

今年の2月16、17日には、司教在任25周年感謝祭が催されたばかりだった。その時の様子が英語新聞やカトリック月刊誌に掲載されたのだが<sup>4</sup>、特別な法衣を召され、おだやかな笑みをたたえた大司教の写真を拝見したのは、つい先日のように思われた。また、イバン語訳聖書禁止事件(4月30日付で発禁解除)が発生し、4月22日に Datuk Seri Abdullah Ahmad Badawi 首相代理兼内務大臣とキリスト教指導者11人との密室会談が開かれた際、大司教もカトリック代表として列席されていたのを、筆者は写真で確認していた<sup>5</sup>。さらに月刊誌の「大司教日誌」欄には、

resignation', 26 May, 2003, p.14.

<sup>4</sup> *New Straits Times*, 'Silver jubilee service for archbishop', 15 February, 2003, p.15. *Catholic Asian News*, March 2003 (Vol.32 No.3), p.3.

<sup>5</sup> *CCM Newslink*, June 2003. これが、対政府交

通例通り5月末までの予定表が公示されていた<sup>6</sup>。その上 MCCBCHS (Malaysian Consultative Council of Buddhism, Christianity, Hinduism and Sikhism)の会長は、2003年7月まで大司教が任に当たることになっていたため<sup>7</sup>、71歳と高齢とはいえ、もうしばらくは、と思い込んでいたのであった。

近い筋から聞いた話とカトリック新聞記事<sup>8</sup>を総合すると、大司教は1989年に一度、心臓発作を起こして入院されたことがあり、ローマ教皇に辞任を申し出られたという。だが教皇からの返答は「補佐役を配置するから、もう少し続けるように」とのことだった<sup>9</sup>。1990年代後半、再び教皇宛の書簡で健康問題を理由に辞意を伝え、2000年には半年のサバティカル休暇を取られた。ようやく今年の5月24日になって、ローマから退任許可が届いたのだそうである。許可状が届くのを心待ちにしていたかのように、即日辞任という、実に素早い退任であった。

その後については、2003年8月中旬現在、オ

---

渉の場での最期の公務となった。

<sup>6</sup> *Catholic Asian News*, May 2003 (Vol.32 No.5), p.36.

<sup>7</sup> 会長は、2年毎に各宗教代表者が持ち回りで担当する。2001年7月5日から大司教が会長を務めていた(*New Straits Times*, 'Archbishop Fernandez is new council president', 6 June, 2001. p.14.)。2003年5月18日付 *New Sunday Times* 記事(p.7)にも、会長として大司教の名が掲載されていた。

<sup>8</sup> *Herald(The Catholic Weekly)*, June 1, 2003 (Vol. 10 No.20) p.1.

<sup>9</sup> その補佐役とは、現在の第三代大司教である。1995年4月、クアラルンプール司教に任命された。

ーストラリアで静養中と聞いている。

## 2. 第二代大司教の履歴など

ここで、半島部における従来のカトリック教会の状況を推察する一環として、当代大司教の略歴に触れる。

1983年10月17日、クアラルンプールの Bukit Nanas にある聖ヨハネ大聖堂において、首都圏下の司教と司祭が一堂に会した。マレーシア人初のクアラルンプール初代大司教(現 Archbishop Emeritus, Yang Berbahagia Tan Sri Dominic Aloysius Vendargon, PSM, D.D.)<sup>10</sup>の退任に際して、在任中の感謝を捧げると共に、翌月就任予定の新大司教を迎えるミサが行われたのである。その時披露された履歴書に従って<sup>11</sup>、抜粋要約したものを以下に記す。

1932年ケダ州スンガイ・パタニ(Sungei Petani)生まれ。学歴は1940年から始まり、ペラ州タイピンの修道院、ケダ州スンガイ・パタニの聖テレサ校、イブラヒム校など14歳までである。1947年からケダ州のエステートや道路事業団の病院で助手を務める。23歳からはペナンの市保

---

<sup>10</sup>初代大司教は、1909年スリランカ北部ジャフナのナランサニ生まれのタミル系。マラヤ連合州の技師だった父親に合流して1919年からマラヤに定住する。1934年に司祭叙階。1955年以降クアラルンプール司教。1972年12月、クアラルンプール大司教に任命される。大司教在任期間は11年間。ペナンの修道会経営ホームに居住の現在、94歳を迎え、車椅子の生活ながら、静かに祈りの日々を送られていると聞く。

<sup>11</sup>*Catholic Asian News*, December 1983 (Vol.10 No.12), pp.2-3.

健局勤務。26歳から神学教育が始まる。シンガポールの聖フランシスコ・ザビエル神学校とペナンの大神学校(College General)で8年間学び、1966年12月、34歳の時、ペナンの聖母被昇天大聖堂で先代大司教より司祭に叙階される。その後は、ペラ州タイピンやペナンの教会で助祭などを務める間、マニラやバンガロール<sup>12</sup>で神学訓練を受ける。1973年からはペナンの大神学校スタッフおよび学院長を2年ずつ歴任した後、1977年11月にペナン司祭に選任される。翌年2月からペナン司教として約5年間在任。1983年7月、クアラルンプール大司教に選任される。同年11月10日に二代目の新大司教として正式就任した<sup>13</sup>。

以上からうかがえるように、その頃のインド系全体から見ればやや恵まれた環境だったとはいえ、10歳の頃から司祭志願であったのに、学校をやめて10年以上も働いていた事情を鑑みると、比較的つましい出身であるといえる<sup>14</sup>。

大司教就任に先立ち「私は人が恐れるような者ではない」「職機能よりも人間関係の方が大切だ」と考える。「開かれた、前向きで楽観的な態度

を保持しよう」「誠実であり、人々と共にあるべきだ」と述べ、教皇ヨハネ・パウロ二世の希望に沿って第二ヴァチカン公会議(1962～65年)の決議事項を施行することが任務である、とした。当時の大司教評は、「温かい人柄」「心が開かれ、積極的で勇気がある」「とても親しみやすい」とある<sup>15</sup>。

### 3. マラヤリ系カトリックのルーツと特徴

では、第二代大司教が所属するマラヤリ系カトリックとは、どのような人々なのだろうか。

1991年のセンサスでは、マラヤリ系マレーシア人は約4万4000人で<sup>16</sup>、国民全体人口の0.3%以下となっている。ルーツは、1500年代からのポルトガルの支配以来、集団改宗と通婚により、キリスト教人口が増えたことで有名な南インドのケララ州である。19世紀以来、英国支配者層がマドラスからタミル系労働者をマラヤに連れて来て、砂糖きびやゴムのプランテーションで働かせた。その際、労働者を管理する人々の必要性が起これ、その任務に選ばれたのがマラヤリ系だったという。つまり、英国人雇用者とタミル系労働者との中間管理者の位置づけにあったわけである。大半は、行政管理者、事務員、病院助手な

<sup>12</sup>バンガロールはカルナータカ州の州都。現在インドのシリコンバレーとして有名である。

<sup>13</sup>*Catholic Asian News*, November 1983 (Vol.10 No.11), p.32.

<sup>14</sup>*New Sunday Times*, 25 May, 2003, p.4. リサーチ中、何人かの華人カトリックの壮年男性から「こういう話をするのは残念だが、華人に比べてインド系は経済的に余裕がないから、一般の上級学校進学ではなく、教会のお金で司祭教育を受ける道を選ぶことが多いのだ」と説明された。もっとも、現在のインド系カトリック司祭や修道士には、博士号保持者も存在する。

<sup>15</sup>*Catholic Asian News*, December 1983 (Vol.10 No.12), p.3.

<sup>16</sup>*Banci Penduduk dan Perumahan Malaysia (Population and Housing Census of Malaysia) 1991, Laporan Am Banci Penduduk (General Report of the Population Census)*, Jilid 2, Jabatan Perangkaan Malaysia, Kuala Lumpur, p.82.

どの安定した専門職や技術職として定期的にマラヤに流入したようである。

マラヤリ系の宗教分布は、大多数がヒンドゥ教であり、次にキリスト教、そしてイスラームだとのことである。クリスチャンの場合、シリア正教会とカトリック教会の二つに分布している。前者はマラヤリ系のみで占められ、礼拝言語もマラヤラム語である。一方マラヤリ系カトリックは、仕事上タミル語が話せる人々であっても、子どもをタミル語教育ではなく、英語教育に向かわせたい。キリスト教宣教師経営の寄宿舎学校に送り出したり、都市部の親戚か友人に子どもを預けて英語学校に通わせたりしたという。インド系の中でも、特に宗教と英語を媒介に西洋化近代化が進み、教育程度が高く、社会経済上昇を達成しやすいといわれている<sup>17</sup>。マレーシアのカトリック信徒の間で約半数を占めるインド系のうち、タミル系が大半を形成しており、マラヤリ系カトリックは、マイノリティ中のマイノリティである。そのため、同じ信仰で異なるエスニック集団の人々との連帯を大切に、タミル系、華人、ユーラジアンと交流があるとのことである。また'D'Cruz, Fernandez, Morais'などポルトガル系の名を持つことが多い<sup>18</sup>。

<sup>17</sup>マレーシア人クリスチャン自身による英語論文で、植民地支配とキリスト教との関係について批判的に論じているものは、筆者が知る限り、存在しないようである。

<sup>18</sup>インドのキリスト教について言及する際、欧米の研究者は各カースト名も明らかにする傾向がある。しかし、少なくとも筆者がこれまで調べた範囲に限れば、マレーシア国内で入手可能なインド系キリスト教に関する論文や著作では、カースト問題が表立って論じられる

#### 4. 第二代大司教時代のマレーシア社会

さて、このようなルーツを持つ大司教であったが、その在任期間は、初代大司教と比べて、大変な巡り合わせだったといえる。初代大司教は、写真からも大らかな人柄であったようにお見受けする。クアラルンプール司教時代から、マレーシアの父 Tunku Abdul Rahman Putra Al-Haj 第一代首相と元同級生だったよしみもあり、国王より称号 (Tan Sri) を授与されてもいた<sup>19</sup>。当時は、ミッションスクールで教育を受けたマレー人指導者も少なくなく、キリスト教会とは友好関係にあり、各宗教の諸民族共に、皆でマレーシアを築き上げていこうという息吹きに燃えていたという。今から振り返れば、非マレー人にとっての蜜月時代だった。

一方、第二代大司教の場合は全く異なる。実際、大司教としての約 20 年間は、各種交渉と会

---

ことは稀である。記述があったとしても、限定的で無難な表現にとどまっている。また、過去に活動した欧米宣教師がマラヤ・マレーシアに残した資料でも、カースト問題を中心に記述したものは、これまでのところ未見である。正教会やプロテスタント教会の場合、インド系コミュニティの間では、教会名によって所属カーストもある程度わかるのだが、カトリック教会では、インド系内の暗黙了解事項として伏せられているようである。これは、マレーシアのインド系カトリック共同体において、カースト問題が解決済みというよりは、むしろ、エスニシティや社会階層の相違などを強調せず、友愛組織としての協調関係が奨励されているという理由によるものと思われる。

<sup>19</sup>1968年6月5日に 'Panglima Setia Mahkota' を授与された。カトリック教会の長が国王から称号をいただくことは、すなわちナショナル教会として認定されたことを意味する。

議に明け暮れる大変多忙な日々だったと聞く<sup>20</sup>。1981年のマハティール首相就任以来、マレー人優遇政策がさらに強化され、イスラーム化政策も着々と施行され、マレーシア社会の状況は大きく変化した。教会側から見ていくと、クアラルンプール二代目大司教が指名された直後の1983年8月28日には、サバ州クダット在住のオランダ系司祭が何者かに殺害される事件が発生した<sup>21</sup>。1984年3月からは、インドネシア語訳およびマレー(シア)語訳聖書の問題などに関する当局との困難な交渉が延々と続いた。1987年10月28日深夜には、大司教館にいたインド系ラ・サール修道士が、理由不明のまま拘禁される事件が起こった。11月17日までに計106名が抑留されたいわゆる Operasi Lalang のはしりである。1988年にかけては、非イスラーム諸宗教の活動に制約をかける州法・州法案が次々と可決され、当局との緊張が高まった。キリスト教の福音真髄として「正義と平和」(Keadilan dan Keamanan)をモットーとされた大司教が「反倫理的」と断じた国内治安法に関しては、折衝を試みるも撤廃には程遠かった。現在まで引き続き交渉中未解決の案件もいくつかある。2002年1月31日に「非ムスリ

<sup>20</sup> 筆者が表敬訪問した時も、予定日や面会時刻が、急の用件で二度ほど変更された。

<sup>21</sup> 聖ペトロ教会の主任司祭 Rev. Fr. Peter de Wit。この事件については、*The Star*, 'Priest found slashed to death in mission', 30 August, 1983, p.7, *Utusan Malaysia*, 'Rektor pusat katolik mati ditetak', 30 Ogos, 1983 (21 Zulkaedah 1403), p.1 などで報じられ、今も関係者の記憶に新しい。

ム共同体にとって、マレーシアの状況はどんどん悪化している」とまで公言されたのは<sup>22</sup>、決して反体制派不満分子の嘆きではない。

2002年6月7日のマハティール首相のヴァチカン訪問も<sup>23</sup>、国内新聞やカトリック冊子では報じられなかったが、裏方役に回って、黙って任務をこなされたのが大司教だったそうである。聞くところによれば、実はこの訪問は、2001年のクリスマスの時、マハティール首相が大司教館に挨拶に訪れ、教皇に招待されるよう取り次いでほしいと要望したのがきっかけらしい。報道規制の強い国内各種の新聞では、首相のヴァチカン訪問を支持するマレー人指導者層の声を紹介されたが、草の根レベルでは腹を立てていたマレー人もいたという。その一部は、ケダ州のPendang と Anak Bukit の補欠選挙キャンペーンで、十字架をかけ法衣をまとったマハティール首相の修正ポスターに「教会高位聖職者マハティール」('paderi besar gereja') という言葉を添えて配布したようである<sup>24</sup>。

<sup>22</sup> *New Straits Times*, 'Council: Respect right to religious freedom', 1 February, 2002, p.8. *JAMS News* No.24(2002年10月) 拙稿「マレーシアはイスラーム国家なのか? - マハティール発言をめぐるキリスト教指導者の反応 -」pp.6-11。

<sup>23</sup> *JAMS News* No.26(2003年6月) 拙稿「マハティール首相のヴァチカン訪問顛末記」pp.10-15。2003年8月中旬のマレーシア国営テレビでは、独立記念日を前にして、マハティール首相の数々の偉業をたたえる映像が次々に流される時間帯があった。その一コマに、首相が教皇とにこやかに談笑している画像も2,3秒ほど含まれていた。

<sup>24</sup> このことが、CCM(Council of Churches of Malaysia)事務局長の Rev. Dr. Hermen Shastri(イ

大司教は普段、関係者と相談の上、合意を取り付けてから行動されるのだが、この訪問に関しては、「慈父のような(fatherly)人柄」(注:関係者の言)で、すべての人に扉を開こうという考えから、一人で決定されたそうである。そして、バンコク駐在のヴァチカン教皇使節 Adriano Bernardini, D.D.博士大司教に連絡を取り<sup>25</sup>、首相を当地で迎える役目を引き受けられたとのことである<sup>26</sup>。

頼まれて労を取ったにも関わらず、首相は当日、専らマレーシア自慢とムスリムの窮状を訴えるにとどまり、教皇の希望に反してマレーシア招待を自ら断った。現状では、ヴァチカンとの公式

---

ンド系メソディスト)をして、2002年7月18日付プレス声明での抗議へと向かわしめた模様である。「キリスト教の象徴や信仰実践を無神経かつ軽薄に用いるのは、クリスチャンにとって不愉快のみならず有害でもある。警察はただちに取り締まってほしい」(*New Straits Times*, 'Doctored picture of Dr M hurtful to Christians', 19 July, 2002, p.4. *CCM Newslink*, July 2002)。郵送された文書でこの声明に接した時、一体どんな背景があってこのような抗議に結びついたのか、筆者には全く見当がつかなかった。

<sup>25</sup>1999年7月24日以来、マレーシアおよびラオス、ミャンマー、ブルネイの教皇使節(外交関係のない国への宗教的全権使節)およびシンガポール、カンボジア、タイのヴァチカン大使であった。2002年度版カトリック人名簿の法衣姿の写真では、胸元の十字架を右手で隠している。

<sup>26</sup>*Catholic Asian News* の「大司教日誌」欄は、2002年5月号6月号共に掲載なしである。掲載再開は7月号以降で、任務開始は7月24日からとなっている。英語新聞記事には「大司教はヨーロッパで休暇中」とある (*New Straits Times*, 'Catholic community welcomes PM's meeting with Pope John Paul', 29 May, 2002, p.2)。

外交樹立の見込みはないそうである。結局、大司教の尽力は水泡に帰した。

一国を代表する首都圏教区の大司教は、国内カトリック教会の総責任者であり、指示を与え導く立場にあるが、この大司教は、大上段に人々を率いるカリスマ的存在ではなく、どちらかといえば、忠実に淡々と任務をこなすタイプの方だったような印象がある<sup>27</sup>。非カトリック信徒の筆者も、初めの頃は不慣れな敬称などを用いて話すように言われたが、時間が経つうちにわかってきたことは、それは部外者の無礼な振る舞いからカトリック共同体の尊厳を守るための通過儀礼であり、実際には、人々が大司教についてフランクに話していることの方が多いということだった。よく耳にしたのが「あの大司教はとても謙虚でもの静かだ」というコメントである。最近の社会貢献の一つに、大司教の発案による高齢者向け施設 Sri Seronok Retirement Village がある<sup>28</sup>。

## 5. 後任の新大司教と転換期にあるマレーシア

三代目の新大司教には、5日後の2003年5月29日から、クアラルンプール司教だった Murphy Nicholas Xavier Pakiam, D.D.が就任されている<sup>29</sup>。筆者は以前、長崎に伝わるカトリ

---

<sup>27</sup>カトリック教会の常勤には、自分から職に応募したという例もあるが、研究員の場合、大司教から資質を見込まれて声がかかり、一般職(建築家や大学助手など)から転職したという話もしばしば耳にした。

<sup>28</sup>*The Star Online*, 'Novel housing for retired folk', 25 May, 2003.

<sup>29</sup>初代大司教と同じスリランカ系タミルの系統を引く。ペラ州タパー生まれの65歳。Batu GajahのSultan

ック物語を聞かせていただいたことがあるが、一見剽軽そうに振る舞われるものの、第二代大司教よりもさらに神経の細やかさなところが感じられる。今後のマレーシアのカトリック教会動向は、この新大司教の力量と采配如何にかかってくることも多いだろう。

思えば、今年マレーシア社会において、さまざまな人事交替があり、時代の節目を迎えているようだ。先述の教皇使節は、4月26日付でアルゼンチン大使に配置転換され、後任は未定のままである。馬華公会(MCA)党首兼運輸大臣のDatuk Seri Dr. Ling Liong Sikは、偶然にも大司教の辞任前日に辞職した。来る10月には、22年間首相の座を務めたマハティール氏が退陣する予定である。

ともあれ、首相と第二代大司教は、同じケダ州出身、1980年代前半に各々の最高職に就任し、同じく心臓を患ったり、奇しくも同年に任を降りるという符合関係にある。交渉や各行事の場で互いに接触が多かったものの、片やムスリム政治家として上昇気運を駆け上り、片やカトリック聖職者として概ね気苦労の連続であった。生い立ちや気質の違いなのか、同時代人としての両者の公生涯や引き際は、かなり対照的だと思われる。

(謝辞)

本稿作成にあたり、情報や資料の提供などで

---

Yusuf 校で初等中等教育を受け、1955年にシンガポールの小神学校に入学。1964年にイポーの聖母ルルドス教会で司祭叙階。マニラのラ・サール大学でカウンセリングの修士号。

(2003年5月27日記、9月11日加筆修正)

お世話になったのは、次の方々である。

Dr. Maya Khemlani David (マラヤ大学言語学部助教授・カトリック信徒・シンド系)

Mr. Augustine Mahalingam (カトリック大司教館研究員・タミル - テルグ系)

Mr. Rufus Bruno Pereira (*Catholic Asian News* 編集チームの一人・マラヤリ系)

Ms Franciska Savarimuthu (カトリック大司教秘書・タミル系)

Ms Ann Savarimuthu (カトリックリサーチセンター附属図書館司書・タミル系)

Ms Philomena Santanam (カトリック大司教館アシスタント・タミル系)